

4) 境界線・タッチについての学習

【目標】 自分と他者を尊重し、安全に安心して暮らすことができるように、ルールを身につけ、境界線（バウンダリー）を守れるようにする。

【原理】 プライベートや境界線（バウンダリー）の概念は、社会生活を送るうえでのルールの原則である。具体的なプライベートゾーンや人との距離感、物や場所の境界線、身体接触のルール（よいタッチ・わるいタッチ）を教え、日常生活のなかで繰り返し確認し、守れているときはじゅうぶんにほめて、よい行動を強化する。

【方法】 ①プライベートゾーンを教え、着替えやトイレなどのルールを確認する。
②人と人との距離（境界線）を具体的な立ち位置で教えたり、物の貸し借りについてロールプレイをしながら確認する。
③よいタッチとわるいタッチの違いを教え、さまざまな例を挙げて区別する。

【注意事項】

ルールは、社会生活において人が安全に安心して暮らすうえで必要なものである。つまり、ルールは「上から押しつけられるもの」「窮屈なもの」ではなく、「自分の安全や安心のためにあるもの」であり、ルールを守ると「自分自身が安全で安心できる」ことを体感することが大切である。指導や支援においては、生徒が主体的にルールを守ることのメリットを感じられるようにする。そのため、教員も、ただルールを教えるのではなく、ルールを通した人と人との関わり（コミュニケーション）を重視しながら働きかけるようにする。

境界線には、①物理的境界線（物や身体、場所に関するもの）②心理的境界線（気持ちに配慮すること）③社会的境界線（マナーやルール、校則や法律など）の3種類がある。ここではわかりやすく物理的境界線の学習シートを掲載しているが、「相手は嫌な気持ちをしていないか？ だれかに迷惑をかけていないか？」「ルールを破るとどうなる？」など、ほかの境界線についても説明するとよい。性的な問題行動は、すべての境界線を破っている。

境界線は、安全な生活のうえでは欠かせないものであり、加害行為となりうる行動を止めるだけではなく、自分の権利を侵害されるような被害を自覚し、助けを求めるためにも必要な概念である。「他者のからだに勝手に触ってはいけない」と教えるのと同時に、「自分のからだに触られたり、他者のからだを見せられたり触らされたりしたら、わるいタッチだから逃げて、助けを求めること」を教えることは、被害の予防教育としても有益である。

信頼できる相手との握手やハイタッチ、あるいは診察や手当などの「よいタッチ」についても教え、人とのよりよい関わり方を考える機会にする。また、学校生活のなかで、ダンスやゲームなど「よいタッチ」を楽しめる活動を取り入れるのもよいだろう。必ずしも、他者と触れあう必要はなく、「ハンドマッサージ」など一人でできるリラクゼーション法をやってみるのも役に立つ。「よいタッチ」による心地よさや安心感を実感することで、「わるいタッチ」による不快感や不安に気づきやすくなる。

境界線の学習では、しばしば「他者の境界線を侵害しない」ことが強調されがちであるが、「自分自身の境界線を守る」ことが基本である。自分の境界線を守るには、境界線を閉ざすだけでなく、「信頼している人に悩みを打ち明ける」（心理的境界線を開く）ことも必要である。つまり、安全や安心のために、自分の境界線を自分自身で管理できるようになることが目指される。

概念を教えるだけでなく、日常生活のなかで生徒自身が「自分の境界線が守られている」と実感できることが大切である。

《ポイント》

- 物理的境界線の学習では、できるだけ具体的に、立ち位置を図ったり、示したり、物の貸し借りのロールプレイをしたりして、適切な距離感や言い方を身につけることができるようにしましょう。
- 実際の生活場面で買い物や登下校、学校内での行動を見直し、適切な行動がとれたときには「ここがよかった」と具体的に伝えながらほめましょう。何度も練習！
- 保護者の協力を得ながら、家庭や地域での行動を確認し、できたことをほめましょう。

【教材の説明】 ※学習シートに対応しています。

プライベートゾーンを覚えよう

プライベートゾーンは、5) 性に関する基礎知識に関する学習 と関連させながら、具体的な身体部位の名称や役割も教えながら、説明する。性器について、「恥ずかしいところだから隠す」のではなく、「大切なところだからむやみに見たり、見せたりしてはいけない」と教えるほうが、性についてネガティブなイメージをもたらしにくい。

他者のプライベートゾーンを「勝手に触ってはいけない」とあるが、相手が断りにくい状況で「触ってもいい？」と聞いたり、誘ったりすることは、本当の意味での同意を得たことにならない。例えば、相手が行動の意味を理解できていなかったり、怖がっていたりしたら、たとえ相手に「いいよ」と言われたとしても、プライベート部分を触ってはいけない。生徒の理解度に応じて、真の同意に関する説明もするとよい。

また、プライバシーに関する境界線があいまいな家庭には、保護者に生徒の課題を説明し、風呂やトイレ、寝室の使い方や、着替えの場所などを見直してもらう。家族であれ、お互いの部屋に入るときにはロックをするなど、ルールを決めて保護者がモデルになるとよい。

人との距離のとり方を知ろう

実際に、生徒と教員で立って向かい合い、近づいていってお互いに心地よい位置で立ち止まり、二人の距離を確認する。フラフープを用いて、パーソナルスペース（個人の空間）を確認したり、床にカラーテープを貼って、位置を示すなど、生徒が視覚的にわかるように工夫する。距離感は、相手との関係

性やそのときの体調や心境によって、異なることを説明する。生活のなかで、そのつど距離を確認し、「どのくらいの距離がよかったかな」と声をかけて、ちょうどいい距離がとれたときには、じゅうぶんほめる。

自分の物と他の人の物をわけてみよう

物の境界線を理解できるように、私物と共有物の違いを明確にする。実際に、校舎内にある物を使いながら確認するとよい。ゲーム形式にして、正しく答えられたら得点をつけるなど、楽しく取り組めるようにする。

物をかりたいとき！ 買うとき！

境界線を越えるときには、必ず相手の許可を得る必要があることを説明する。借りたいときの頼み方やお礼の言い方など、ロールプレイで練習をする。買い物の場面も、ロールプレイをするのが役立つ。その際、お金の役割や金額の計算の理解度も確認する。これを、普段の学校生活の場面で実践していく。保護者にも取り組んでいる課題について伝え、買い物や外出時の行動の見守りやうまくできたときには、ほめてもらうように願う。

場所にある境界線！？

学校内や通学路にあるマーク（目印）を探し、その意味について確認する。トイレや更衣室のほか、「女性専用車両」や「スタッフオンリー」など、入場制限のある場所も確認する。

よいタッチとわるいタッチ①

タッチそのものは悪いものではなく、お互いに納得できて安心できる接触や必要な接触は、「よいタッチ」であると教える。よいタッチかわからないときは、タッチをする前に相手に確認をしなければならない。教員も、生徒の身体に触れるときは（呼ぶときに腕を引っ張ったり、背中を押ししたりするなど）、必要な接触かどうかを考えたうえで行動する必要がある。不必要なタッチは避け、必要な場合も声をかけてから触れるようにする。ハラスメントの予防になり、生徒にとってよいタッチの見本にもなる。

保護者が、子どもの年齢や発達にそぐわない身体接触をしていたり、しつけにおいて身体暴力を用いたりしている場合、それらは境界線の侵害でもあり、子どもが「わるいタッチ」を模倣する可能性があるため、保護者に子どもへの対応や関わり方の見直しを求める必要がある。

よいタッチとわるいタッチ②

よいタッチとわるいタッチの区別ができたか、さまざまな例を挙げながら確認をする。できれば、「どうしてそう考えたのか」を聞いて、生徒の理解度を確認するとよい。わるいタッチは、本人や相手、周囲にも不利益をもたらすものである。わるいタッチをしないことで、自分にとってメリットが大きくなることを強調し、わるいタッチをせず人とよりよいかかわりが持てることを伝え、励ます。